

あいまい

アメリカ人あたりに、日本語はあいまいだと云われてすっかり恐縮し、日本語を恥じる風潮が広まった。とにかく明快、論理的でなくてはいけないように勘違いする。みずからおとしめることになる。

俳句はそのため、もっとも大きな被害を受けているのだが、不幸か幸いか俳句作者は多くそれとは無関係に、あいまいを避け、わかりやすい句を作るのである。

この際、はつきりさせておかななくてはならないのは、俳句の命はあいまいにある、ということである。この点、俳句は世界に冠たる詩だと云つてよい。ヨーロッパにも形而上詩という難解をおそれぬ詩があるにはあるが、含蓄、多義性において遠く俳句には及ばない。

だいたい文学においてあいまいが美の源泉であることにヨーロッパが気づいたのは、やつと七十年前のことである。わが国では室町時代の心教がすでに含みの妙を説いて、あいまいの詩学の

先駆をなしている。

一句の意味はひとつに限ると考えるのからして大きな誤解で、受け手によって句意は変わる。十人十色の受けとり方ができてこそ俳句はおもしろい。あいまいさは、作者に多くの調意を許容し、受け手には自らの意味を生み出すよこびを与える。

俳句は本質的には挨拶の詩であつて、相手を立てる心がある。判りきつたことでは失礼になる。相手を重んじればどうしても、あいまいな措辞となるほかはない。論理的、平明、をよしとする欧米においても、外交で交わされることばは、かなりあいまいである。それが相手方に対して礼儀にかなうのである。俳句はそれとは比べものにならないほど含みの多いことばを用いる。野暮などはじめから相手にしない。

白を白と云ってしまったのでは、相手に解釈の余地はない。それでは無視されたようでもしるくないだろう。あえて、ばかす。玉虫色のことばなら、見る人によってそれぞれ違った色に見える、味わいが深い。

一般に詩歌は散文に比べて、陰影、含蓄に富み、解釈が微妙になる。浅い理屈や、わかり切つたことば遣いは詩の容れないところである。俳句はそれが徹底している。

あいまいの美学は俳句を支える原理であるが、それを活用するには円熟、老練を要する。高齢の俳人の句が輝くゆえんである。

あえて美しくあまいであるのは容易ではない。へたをすると闇夜のコウモリ、音はすれど姿は見えずともなりかねない。

モンタージュ

映画草創の時代、ドラマ作品を作るのにさんざん苦労した。名舞台を忠実にフィルムにおさめるのだが、さっぱりおもしろくない。それどころか、ひどく退屈なものになる。やはり映画には演劇と違った表現法があるに違いないというので映画製作者、監督の研究が始まり、ついにモンタージュ（組み合わせ編集）理論が生まれることになった。主唱者はエイゼンシュテイン（ソ連）である。

いまは半ば伝説的だが、エイゼンシュテインはモンタージュのヒントを俳諧から得たといわれる。外国人が俳諧の中にひそんでいる詩法を発掘したことは、早くは寺田寅彦などをおどろかせたが、いまなお俳句はモンタージュの考えとは疎遠であるから不思議である。

モンタージュとは部分と部分をつなぎなしに直接組み合わせる技法である。ことばの表現についていえば、主部、述部による論理を超えた超現実的な意味、ニュアンスをあらわす。「われ